人生100年時代 豊かなライフスタイルを実現する軽井沢リゾートテレワーク 新価値創造・イノベーションの誘発



軽井沢の紹介



- ①人口20,000人 (增加傾向)
- ②別荘17,000軒(保養所350軒)
- ③観光客 870万人
- 4東京から62分(北陸新幹線)
- ⑤通勤定期 500人 (一か月13万円)
- ⑥乗降客 3800人 (年間138万人)
- ⑦夏・冬五輪開催地(世界唯一)



ウエルネス

- ①標高1000〜は人間の胎児と同じ気圧。 (人間にとって最も居心地の良い環境)
- ②五感を刺激する環境。
- ③発想力・想像力が豊かになる。

(デフォルトモードネットワーク)

- 4高原野菜をはじめとする豊かな食材。
- ⑤長寿日本一の長野県
- ⑥豊かな森 日本三大野鳥の森がある。
- ⑦アレルゲンが標高1000 伝を超えると激減する。

スポーツ

1964年の東京五輪の総合馬術 1998年の長野五輪のカーリング

夏季冬季五輪が開催された世界で唯一の場所

テレワークに最適な環境

(1) 多種多様な人的ネットワーク、別荘コミュニティー

压倒的人材 ①別荘団体

公益財団法人軽井沢会 南原文化会 軽井沢しらかば会

②大学0B会

赤門軽井沢会 軽井沢三田会 セントポール軽井沢会 軽井沢成蹊会等 ※県人会でないところが ポイント



テレワークに最適な環境 (2)イノベーションの創発・新価値創造

軽井沢は、

イノベーションの種が埋まっているとても肥沃な土壌

①新結合 byシュンペーター

軽井沢町内にあるレストラン・barでのコミュニケーション 別荘で開催されるBBQ/ワイン会

共創の場

②オープンイノベーション

③新価値創造





家庭画報

2019年8月号

軽井沢特集より

軽井沢でリゾートテレワークが普及した歴史的背景① (人的交流)

サロン文化から別荘文化へ

①万平ホテル、旧三笠ホテルでは、西洋人・政財界人などの富裕層の交流が盛ん。

②大正・昭和に入ると、別荘でも様々な交流が活発に行われるようになった。

万平ホテル(旧軽井沢)

1894年(明治27年)に開業(亀屋ホテルが前身)。 宣教師や西洋人が主に宿泊

「軽井沢の鹿鳴館」

三笠ホテル(旧軽井沢)

1905年(明治38年)に完成した洋風建築の三笠ホテルでは、渋沢栄一、徳川慶久、徳川義親、近衛文麿といった政財界の名だたる顔ぶれが宿泊、華やかな社交が行われいた

※現在は軽井沢町役場所有、記念館となっている。



軽井沢でリゾートテレワークが普及した歴史的背景② (交通インフラ整備・先駆者の存在)

転機となった1990年代(移住者・別荘所有者・二拠点居住者が増え始め同時にテレワーカーも増加)

- (1)交通インフラの整備
- ①1993年の上信越自動車道の碓井軽井沢IC開通、
- ②1997年に北陸新幹線(当時長野新幹線)の高崎~軽井沢~長野まで開通。

(2) 先駆者の存在(松岡温彦氏)

1990年代からサテライトオフィス、リゾートオフィス、リゾートテレワークの意義を訴えていた軽井沢のキーパーソン。日本のテレワーク普及に極めて大きな功績を残された。

軽井沢は仕事に最適な場所との考えで、住民、別荘所有者・移住者・二拠点居住者を対象にテレワークの勉強会、体験会、啓発活動を長期にわたり積極的に行っていた。軽井沢に集まり会議をしたり、別荘でテレワークをする人が増え始め、同時にホテルでもフォーラム、各種勉強会などが行われるようになってきた。

松岡温彦氏プロフィール

早稲田大学卒、住友信託銀行、調査部次長、業務部門室長を経て、住信基礎研究所常務取締役、住友信託銀行審議役。志木サテライトオフィス研究 会会長、湘南リゾートオフィス研究会副会長、軽井沢リゾートオフィス研究会会長を歴任、一般社団法人軽井沢ナショナルトラスト前会長、軽井沢 リゾートテレワーク協会顧問。。2019年没。

1991年

「遊職人種宣言、リゾートオフィスのすすめ」

1998年

「人、われを「在宅勤務社員」(テレワーカー)と呼ぶ 本当の自分を取り戻すための52章」

「人、われを「在宅勤務社員」(テレワーカー)と呼ぶ」 本当の自分を取り戻すための52章

「自立」したワークスタイルが、閉塞社会を変える。10年間も「在宅勤務(テレワーク)を続けてきた現役会社飲員が、 ビジネスマンの生き方を根底から問い直す 松岡温彦氏著 実業之日本社刊 1998年初版

目次

^{第一章} テレワーク**へ**の道

^{第二章} テレワークの為のライフスタイル

^{第三章} テレワーク必携の道具

第四章 自己管理のコツ

第五章 テレワーカーに必要な資質

^{第六章} テレワークを支える知的インフラ

《個人にとってのメリット》

- ・通勤からの解放。
- ・仕事に集中できて能率が上がる。
- ・自分で考える時間が持てる。
- 受信型の人間から発信型人間へと変わる。
- ・家族との協力、地域コミュニティーとの絆が深まる。
- 自分の能力と可能性を見極めことができる。
- ・自分の仕事の延長線上にライフワークを見つけることができる。

《企業と社会にとってのメリット》

- 大きな事務所がいらない。
- 24時間世界を相手に仕事ができる。
- ・管理部門を大幅削減できる。
- 通信革命による新たな事業が展開できる。
- ・個人の能力を呼び覚ますことが経済を再び活性化させる。
- ・地方に新たな可能性を拓く。
- 高齢化社会や環境問題にしっかりと対峙できる。



論文

松岡温彦氏は、1990年から志木サテライトオフィスで実際に 実証実験をされ、論文も多く執筆された。

- ①リゾートオフィス研究〈リゾートオフィスの今〉2016
- ②リゾートオフィス研究部会活動報告(論文部門) 2009
- ③志木サテライトオフィス実験報告 1990
- ④リゾートオフィス研究部会活動経過報告 (支部・研究部会・学会活動だより)
- ⑤サテライトオフィス(新ビジネスゾーンの計画〈特集〉) 1991
- ⑥通勤にやさしいまちづくり(やさしいまちづくり)1991
- ⑦リゾートオフィス研究部会活動報告(論文部門) 2010
- ⑧テレワークと企業内インフラの外部化2002
- ⑨特集「リゾートオフィスの今」に寄せて 〈特集〉リゾートオフィスの今2016

軽井沢でリゾートテレワークが普及した歴史的背景③2018年~2019年

- (1)軽井沢リゾートテレワーク協会設立前 2017年~2018年6月
- ①2017年9月~11月
- 総務省にテレワークの啓発活動を軽井沢連携して実施いただくべく提案
- ②2018年1月
- 総務省「車座ふるさとトーク」軽井沢にて開催。山田総務大臣政務官(当時)
- ③2018年2月~6月
- 軽井沢リゾートテレワーク体験会(4回開催 延べ150人のワーカーが参加)

(2)軽井沢リゾートテレワーク協会設立後 2018年7月~2019年

42018年7月

軽井沢リゾートテレワーク協会設立(軽井沢観光協会・軽井沢町商工会中心)

⑤2018年~19年

東京でテレワークフォーラム開催、

軽井沢で→次ページご参照リゾートテレワーク体験会

軽井沢でテレワークの啓発活動

軽井沢にワークスペース20か所以上オープン(民間主導)



軽井沢リゾートテレワーク協会の今後の戦略 軽井沢の現状

①人口急増 コロナ以降、移住者・二拠点居住者が急増

2017年~2019年は毎年100人程度の人口増が、2020年は400人増え20,881人へ

※住民票を東京に残したままの二拠点居住者・別荘所有者も急増⇒リゾートテレワークの定着

②ライフスタイルの変化 ライフとワークが完全融合⇒毎日がワーケーション

最近の移住者の属性を見ると、大企業・元大企業で現在独立・高学歴・海外留学経験・国際結婚・地域に貢献したい・家族の時間を大切にしたい・積極的で情報発信力が高い・人的コミュニケーション力が高いといった30代40代が多い。特にコロナ以降その傾向が高まって来た。

③多種多様な人材の融合 イノベーションの創発

地元住民・別荘所有者・観光客・リゾートテレワーカーと新規移住者が交わることで化学反応を起こし、 イノベーションが起きやすくなる➡シュンペーターの新結合

④不思議と多いセレンディピティ—な出会い→活発な人的ネットワーク

軽井沢で偶然出会った人から生まれる新価値創造

別荘所有者・移住者を中心とした大学のOB会組織(東京大学・慶応大学・立教大学・成蹊大学など) 別荘所有者を中心とする別荘団体(一般財団法人軽井沢会・南原文化会・軽井沢別荘団体連合会、

軽井沢しらかば会など)

軽井沢リゾートテレワーク協会の今後の戦略

- テレワーク・ワーケーションの枠を超えた新戦略2021
 - (1)公益性 軽井沢の観光まちづくりへの寄与
 - (2) 新価値創造 軽井沢リゾートテワークのブランディング・エビデンス
- ①軽井沢AI拠点構想との連携 (軽井沢町、信州大学、東京大学の3社包括契約) ➡AIワーケーション
- ②次世代リゾートテレワーク (ワーケーション) のプランニング
- ③ビジネスマッチング(自治体、企業)
- ④リゾートテレワークに関するコンサルティング
- ⑤ワーケーションで軽井沢をゲートウエイとした周辺エリアの活性化

信州リゾートテレワーク

https://shinshu-resorttelework.com/

軽信山白佐茅駒沢町内村市市市市市